

# 「創造的な活動こそが、息吹なのである。」

—文化創造活動の発信・受信基地としての新施設—

法学部 わたなべかずみ  
渡部一実

「サークル活動を中心とした文化活動に必要な設備を備え、その中で自由に学生を中心とした利用者が活動をし、学生が自主的に管理する中で学外にも開放され、生活と文化活動の拠点となる場所である」・・・新施設建設運動を貫いてきた理念である。

理想は高く、道程は険しい。

この理想を実現するための前提条件として、新施設に必要なのは「流動的であること」だと、私は思う。

新施設がどんな建物になるにせよ、そこは人にとっての「玄関口」でなくてはならない。「玄関口」とは、あくまで入り口であり、そこで完結してはならない。

玄関で受けた刺激、玄関で出会った人、玄関での活動・・・それは総て、その人間の将来への糧とならなければならない。

そんな「玄関」の間取りは当然広くあるべきであり、中大生・他大生・地域住民・・・時間と空間の許す限り、あらゆる人にとっての玄関口であって欲しい、そう思う。

そして利用者は、「玄関の広さ」のみに満足することなく、「奥行き」の深みを追求して欲しい、そう思う。

新施設は、単に「立派な施設」として存在するのみでは、意を成さない。我々の創造的な活動こそが、新施設の息吹なのである。

新施設は、「限りなく広い玄関」と「限りなく深い奥行き」を持った、「文化創造活動の発信・受信基地」として存在して欲しい。

・・・ささやかながら建設運動にたずさわった者のモノローグである。